

故喜多義人副会長を偲んで

喜多義人先生が昨年九月二〇日の夜（二一日午前〇時四分）にご逝去されてから、早くも九ヶ月あまりがたちました。この間、軍事史学会の理事会が何度か開かれましたが、本来ならばその場に副会長としておられるはずの先生のお姿はなく、いつもどうしようもない虚しさや寂寥感、そして喪失感に襲われています。今般、先生の追悼号が編まれるにあたり、軍事史学会の場で長らくご厚誼を得ていた関係で、こうして追悼の辞を執筆させていただけることになり、日本大学法学部の関係者の皆さまには感謝の言葉もあります。厚くお礼申しあげます。

軍事史学会における喜多先生とおつきあいが深まりましたのは、私が学会誌『軍事史学』の編集委員長を務めていた際に、編集委員、編集副委員長をお願いしていたことにはじまりますので、およそ一五年前にさかのぼるかと思えます。先生はすでにそれ以前の二〇〇一年に、「英軍による降伏日本軍人の取扱い―南方軍終戦処理史の一断面―」によって、学会誌掲載の最優秀論文に贈られる阿南・高橋学術奨励賞を受賞されましたし、「日本軍の国際法認識と捕虜の取扱い」（平間洋一、イアン・ガウ、波多野澄雄編『日英交流史 1600-2000 3―軍事―』東京大学出版会、二〇〇一年）をはじめとする旧日本軍の国際法教育や捕虜の取扱いをめぐる一連のご研究で著名な方でしたので、もちろんお名前には存じあげていました。しかし、直接お話を交わすようになったのは、約一五年前からになります。その意味では、先生とのご交誼は、他の方に比べれば短かつたかもしれません。

ただ私自身は、先生とはかなり濃密な時間を一緒に過ごさせていただいたという思いがあります。学会においては、先に記しましたように編集委員長と編集副委員長としてタッグを組み、現在の学会誌のスタイルを作りあげてきました

し、私が会長になりましたあとも、理事兼編集委員長、そして副会長として共に学会運営に携わってきました。それゆえ私が困ったときにまつさきにご相談し、お助けいただいたのが先生でした。

編集委員会や理事会は先生のご尽力で日大のお部屋を使わせていただくことが多かったのですが（大会も開催させていただきました）、先生と私の帰り道が、幸いにも同じ方向でしたので、道すがら学会のことをはじめとして諸々の話をしました。喜多先生も私も飲むのが好きなほうでしたので、話が尽きないことをいいことに「ちよつと寄つていきませんか」と、そのまま後楽園のお店に入ってしまうこともしばしばでした。先生の朴訥とした語りと茶目つ気たつぷりな笑顔に癒されながら、法学者らしい明晰なご考察をお聞きするのがとても楽しい時間でした。

学会以外の場合でも、先生とは日本赤十字社の研究で一緒にさせていただきました。もともとその分野に疎かった私にとつて、多くを学ばせていただく貴重な機会になりました。これは、現在やはり日本大学法学部におられる国際法がご専門の河合利修先生のお誘いで、日本赤十字豊田看護大学が所蔵している戦前の日赤関係文書をもとに共同研究をしようというプロジェクトで、小菅信子山梨学院大学教授もメンバーでした。その成果は、やがて『日本赤十字社と人道援助』（東京大学出版会、二〇〇九年）として結実し、同書はその後、当該分野に関心を抱く日本内外の研究者にとつての必読書になりました。この研究プロジェクトも実りの多い、非常に楽しいもので、喜多先生との良き思い出です。

そのような学会活動等の関係で何度か先生の研究室にお邪魔させていただくことがありました。その際には、飲み物やお菓子類をいつも勧められたのですが、本来それらは学生のために用意してあるということをお聞きして、学生想いの教育者としての一面をうかがい知ることができました。

ただ先生とご一緒させていただくようになってから気がかりだったことは、いつの頃からか、眼や足等の体の不調を訴えられることが多くなったことです。病気が治ったら、いつもの本郷のお店で飲みましょう、と仰つていらした

のですが、学会の会議兼懇親会の場でもあったそのお店に、とくに近年は参加されることがご無理になっておられました。あらたに大病を患われ、入退院を繰り返されるようになっていたからです。

学会会長として、私自身が悔やまれますのは、もっと早くに副会長をお願いしていれば良かったということです。喜多先生は俺がおれがという自分を押し出されるタイプではなく、常に謙虚な姿勢を崩されない方でしたので、いいタイミングをみはからって理事会に提案しようと思っていたのですが、どうやら適切な時期を見誤ってしまったようで慙愧に堪えません。

また個人的には、故郷の和歌山においてになりませんか、先生からはたびたびお誘いいただいていたのですが、高野山の宿坊に泊まり故郷をご案内いただくという約束は果たせなままになってしまいました。誠に残念です。

喜多先生は本来ならば、これからますます研究者としても教育者としてもご活躍が期待される方でした。また、ゆくゆくは学会のトップになられる方だったと思います。もっとも先生はおそらく、そうした大役をお引き上げできるような者ではございませんと、いつものように慎重深い言葉を発せられていたかもしれません。

あるとき何気ない会話のなかで、私もなじみのある山梨の川で、先生がよく釣りをなさっていることを知り、驚いたことがあります。お忙しかった現世から離れ、先生は今ではゆつくりと溪流釣りを楽しまれているでしょうか。喜多先生、お世話になりました。どうぞ安らかにお休みください。

令和三年九月吉日

軍事史学会会長 黒 沢 文 貴